

無縁納骨堂とイチャルパ

神に神酒を捧げる儀式『カムイノミ』



納骨堂の建設と墓地改装

アイヌ民族の墓標は、高江、西泊津、泉、節婦、東川地区に残っていました。しかし、風雨にさらされ老朽が激しいこと、無縁仏となっているものが大半であるため、北海道ウタリ協会新冠支部（現新冠アイヌ協会）は、かねてから墓地改装について陳情していました。

昭和 58 年から判官館森林公園内の納骨堂の建設と墓地改装の移転が開始され、5 年間でこの事業は終了しました。以来、9 月 18 日に判官館無縁納骨堂前で、先祖供養の「イチャルパ」が新冠アイヌ協会によって行われ、「カムイノミ」や「古式舞踊」も行われています。



古式舞踊の様子



判官館森林公園内「無縁納骨堂」

- ・昭和 58 年：泉地区共同墓地 122 体納骨
- ・昭和 59 年：西泊津地区共同墓地 291 体納骨
- ・昭和 60 年：節婦地区共同墓地 155 体納骨
- ・昭和 61 年：東川地区共同墓地 131 体納骨
- ・昭和 62 年：高江地区共同墓地 155 体納骨



アイヌ文化独特のお供え物

判官館のアイヌ文化を知る その2

黒いキツネがいた伝説

アイヌ民族は、さまざまな伝説を生みだしています。動物や神様、中には妖怪が登場する物語もあります。新冠には興味深いアイヌ伝説が残されていますが、特に「判官館」は神秘的なお話が残されています。

その昔、「ピボク」と呼ばれていた判官館付近には、黒いキツネが居たと言われています。このキツネは不思議な力を持っており、アイヌ民族に危ないことが起きる時はあらかじめ教えてくれたり、助けてくれたりしました。

ある時、ピボクの人々は敵から攻め立てられ、生き残ったわずかの人たちが岩の上に追いつめられました。もういよいよ駄目かという時、神に祈りを捧げてからゴザを広げて岩から飛び降りました。すると不思議なことに、鳥のようにふわりと飛んで怪我もなく無事に逃げることができました。これは、判官館に住んでいる黒いキツネの御加護ということでした。

- 判官館は、鎌倉時代の武将である「源九郎判官義経」がこの地に「館」を築いた伝説から名
- 付けられましたが、義経とアイヌ民族が交流を
- していたという言い伝えも残されており、アイヌ文化に関連する神秘的な所と言えます。
- 判官岬の方にはいろいろな伝説の看板がありますので、ぜひ足を運んで判官館のアイヌ文化を学んでみてはいかがでしょうか。



大切にしたいタコッペ湿原

判官館森林公園を歩いていると、「タコッペ湿原」という木道で散策できる場所があります。この湿原には、タコッペと呼ばれる植物がたくさん群生しています。タコッペは、細長い草が集まったように生息しており、この場所に足を踏み入ると、何か別の世界に迷い込んだような気分させてくれます。

- タコッペは、「ヒラギシスゲ」という正式な学名があり、カヤツリグサ科スゲ属の仲間
- 分類されます。この植物は、ここ判官館で生息する姿になるまで約 300 年かかるとされており、今見られるタコッペは、昔々から生きているものになります。
- 以前の新冠には湿地が多くあり、この植物もどこでも見られるものでした。昔の子どもは、タコッペに飛び乗りながら遊んでいました。その独特な様子から「ヤチボウズ」とも呼ばれていました。開拓時代になると、邪魔な存在になったので至る所にあったタコッペは取り除かれてしまい、今では珍しい植物となりました。



タコッペの呼び名は、アイヌ語が由来となっています。昔のアイヌ民族は、「タクッペ」と呼んでいました。日高管内の平取町には、この植物がぴょんぴょん飛び跳ねる妖怪として捉える言い伝えが残っています。

判官館の湿原には、エゾノリュウキンカやミズバショウ、ホザキシモツケ、ツリフネソウなど、四季折々の草花が彩り添えています。ぜひ足を運んで、自然の豊かさとアイヌ文化の神秘性にふれてみてはいかがでしょうか。